

近代家族における夫婦関係の 不安定性

——性格の異質性からの考察——

宮 野 直 子

1

近代社会の成立・発展とともに家族もまた近代化され、旧来の家族制度は崩壊の一途をたどり、家族形態は、著しく縮少し、夫婦と未婚の子女からなる核心家族 (nuclear family) が近代家族の一般的形態となった。このような家族は、近代社会に最も力動的に適應出来る家族形態として人々から期待されていたのであったが、それに相違して近代社会の急激な社会變動の影響は、当然この家族にも波及し、近代家族は、不安定性をその特徴とする結果となった。すなわち近代家族における著しい離婚、遺棄、別居などの家族解体现象の増大は、明らかにこの事態を露呈しているともいえよう。とりわけ近代社会の分業の発達や文化變動は人々に心理的・文化的差異を増大せしめ、これらは家族関係へも浸透し、家族へ多くの葛藤をもたらしたものであった。そのような葛藤のなかでも最近ことに注目されているものは、夫婦間の性格の差異によるものであろう。近代家族の夫婦関係の不安定性の諸現象の代表的なものとして、クロー¹⁾ はまづ性格の不一致と性的不調和をあげている。またメリルとトルックサル²⁾ も性格の相違は、結婚の葛藤における明確な役割を演じているとのべ、たとえば家庭へ客をたえず招くことをこのむ社交好きの夫は、静かに読書で夕べを過ごすことを望む妻と適應することは、困難であると例証した。さらにフオスター³⁾ も夫婦の適應上の最大の困難を両方の基本的性格の差異と条件づけら

れた習慣と態度の不一致から起こることを認めた。そして夫と妻の紛争は、結局根源的には性格上の問題に帰する。種々な具体的問題は、ただその徴候にすぎない。たとえば金とか性とか子供とかに関して問題は生じるであろうが、根本的には性格上の相違にあるのだからこれらの一つ一つを解決してもやはり問題は、また別の形をとって現われる。そしてそれは第三者からみてはつまらぬことも当人同志には深刻な性格上の葛藤となるとのべている。このように見てくれば近代家族の夫婦間系の不安定性にこの性格上の差異が占める比重は、相当重要視されてよいのではなかろうか。

さて性格上の異質性が、上にのべたように何故夫婦関係を分離に導びきやすいのであるかという原因は、所謂社会の一般的通念として同質性は、結合を誘致し、異質性は、分離を惹起するという概念によるのではなかろうかと私は考えるのである。このような概念に基づいてあらゆる夫婦間の性格の異質性が夫婦関係を解体に導びき不安定にするということについて私は、若干の疑問を持たざるを得ないのである。そして異質にみちた近代家族の夫婦間系のなかに前近代には見られない新しい結合をその不安定性のなかに我々は散見出来ないのであろうか。私は以下にこれらの問題を解明したいと思う。

2

一般に社会的結合の強弱は、その社会を構成する人々の同質性と異質性によると考えられている。すなわち身体的特徴、心理的性質、言語・宗教・教育・道徳・習慣・風俗などの生物的・心理的に類似している人々や文化内容や生活程度において同質的な人々によって形成されている社会の結合度は強靱で安定しているが、一方これらが異質的である時にはその社会は、分離されやすく不安定であるといわれている。このような傾向は、最少の社会集団の一つである近代家族の夫婦関係において妥当するものであろうか。

バージェスとコットレル⁴⁾は526名の結婚した夫婦を対象にして調査を行った結果、夫婦の両親の宗教、夫婦の教会における参加の程度、夫婦の教育の程

度、夫婦の父の職業、夫婦の生家の社会的地位などにおいて類似している夫婦は、よく調整されたグループとして最高度の適応を示しているとのべた。すなわち夫婦の文化的背景が、同質的であるとき、その夫婦関係は、結合が強固に保持され安定しているというのである。このように夫婦関係の安定性は、社会的地位とか、その他の文化的同質性が不可欠の要因であるということは、今日ではもはや疑をさしはさむ余地はないであろう。ではこのような夫婦関係における同質性が、安定をもたらすというこの法則は、パーソナリティー、すなわち性格における次元においても妥当するものであろうか。私はそれが問題であると考えられるのである。この法則にしたがえば、類似した性格の夫婦は、おのづから意気投合して親和を生じ、それに基づいて相互の愛着は強く、その関係が安定しているが、これに比してその性格が異質的である夫婦は、相互に冷淡で無関心で当然反感や分離を生じ不安定とならざるを得ないということになる。

我々が日常経験するところによれば、このような傾向は、かならずしもすべての夫婦関係に妥当するとはかぎらないことを至るところに我々は認めることができるのである。すなわち夫婦の性格において相互に類似するものよりむしろ相異した夫婦の方が円満な家庭を形成し、相調和している事実を我々は、しばしば見受ける。このようなものは夫婦相互の性格の差異が、一種の愛着を引きおこしている要因とも考えられるのである。元来差異は、相互間に反感や無関心を誘致し、分離を生ずるのが一般的事実であるが、以上のような愛着を何故この場合生ずるのか我々は奇異に思われる。しかしこの場合、注意しなければならないことは類似による愛着とこの場合の差異による愛着とはおのづからその様相を異にしていることである。すなわち類似は、どのような種類のものであってもすべて親和の情を生ずるが、これに反して性格の異質性は、その性質のどのようなものもすべて愛着を生ずるのではなくてある種類の性格の差異は、何等結合を生じなく、むしろ分離の要因となり、ただ特種の差異のみが愛着を生じ、その結合度を強めるのである。そのような差異とは、すなわち相補

完し、相互に助力し、有無相通じ、相互に完全にし合うような差異であり、これのみが親和の傾向を形成するのであると思われる。このような性質を持たない差異は、愛着よりむしろ反感や分離の傾向をともなうことが多いのである。以上のべたような差異の親和について、ベエン⁵⁾も、「ある種の差異は、相厭はしめ、或種の差異は、相親しましめる。一方は競争に導かしめ、他方は友情を生ずる。もし一方が、他方の求めてしかも有しないものを有する時は、ここに積極的愛好の根原がある」とのべ、すべての差異が、愛着を生ぜず、ただ補完的差異のみがこの傾向があることを指摘している。またジムメル⁶⁾も「吾人は一方において吾人に相類似するものにより、他方においては正に反対するものによって引きつけられる。反対するものは吾人を補って完からしめ、相類似するものは吾人を強からしめむ。前者は吾人を鼓舞し、後者は吾人を安からしむ」とのべている。このように異質的なものの中で相互に補完する差異のみが愛着を誘致し、夫婦関係を安定せしめるのであるが、これはどのような要因に基づくものであろうか。それとともに我々は、同質的な性格の夫婦と補完的差異の性格の夫婦と比較しどちらがよく適応が行なわれているかについて次に性格に分析を加えることによって説明しよう。

3

以上の性格の補完的差異に関する問題を解明する前に、まづ性格の概念について簡単に説明しよう。今日において性格に関するその定義は、さまざまになされている。マクドウガルやゴールドンおよびクレツチュマー⁷⁾などは、「性格は人の生活過程中に生ずる情緒的・意志的反応可能性の総体」とであると定義し、ことにその意志的力学的要素を強調した。あるいは行動主義の心理学者は、性格特性を行動特性と同じものであると考え、この立場から「ある特定の個人の行動の特徴の型 (pattern)」と定義した⁸⁾。この行動特性による性格の定義づけは、行動特性が第三者によって観察が可能であるような活動によって表現されるから、きわめて明確に表現されているように感じられる。たとえば「勇

敢である」という行動特性は自己の快樂・自由・生命を危険にさらすことにもひるまずある目標へ到達しようとする行動であると考えられる。しかしながらこの行動特性にひそむ行動の動機，とりわけ無意識的動機をみるなら多くの全く異なった性格特性を包含していることが理解されるのである。たとえば勇敢な行動は実は野心という欲求 (need) にもとづいている場合もあり，あるいは人に賞讃されたいという欲求から生じることもあろうし，また相手へのかぎりなき敵意の欲求からこの行動をとったかも知れないであろうし，さらにまたは純粋な献身という昔からの勇気の基礎とされている動機によって決定されているのかも知れない。このようにして考えれば，この行動主義の性格の定義は，行動の表面のみをみてその根底的な要因が看過されているのである。それで性格とは行動の基底にひそむ欲求の体系と考えた方がより適切であるといえよう。換言すれば，それは自我によって統制された欲求の体系であり，このように考察すれば性格とはパーソナリティーと同義とも解される。勿論人間は他の動物と異なり，これらの欲求が統制され体系づけられる時，そこには文化的・社会的要因が大いに作用することを看過できないのであるが，ここでは性格の概念の解明にこの欲求の次元より思考することとしたい。

さてこのような性格の基礎となる欲求は，次のような三種類のものによって構成されている。(1)個人の生活を中心にする個体保存の欲求，(2)世代と世代をつなごうとする種保存の欲求，(3)個人と個人とが手をつなぎ合って集団生活を続けようとする社会活動の欲求があげられる⁹⁾。(1)と(2)は生得的であり(3)は主として学修され，後天的に獲得されるもので我々が関心を持つのは，当然この部類である。さて近代家族における夫婦関係をこれらの欲求によって焦点をあててみる時，それはどのように分類されることが出来るであろうか。マレー¹⁰⁾は人間の欲求を分類する体系を示したが，その中で夫婦関係にとりわけ必要な欲求の分類を下に示そう。

諸 欲 求

自己卑下 (Abasement) —— 非難・批判あるいは罰を受けること。自己自

身を非難し傷つけること。

成就 (Achievement) ——何かを創造したり、他の人々と優劣を争うために勤勉に働くこと。

接近 (Approach) ——他の人々に近づき相互作用をたのしむこと。

自治 (Autonomy) ——他の人々からの強制をしりぞけること。支配からのがれること。中立し独立していること。

尊敬 (Reference) ——他人を尊敬し、賞讃すること。

支配 (Dominance) ——他の人々の行動に影響をあたえ統制すること。

敵意 (Hostility) ——他の人々と戦い、傷つけること。

養成 (Nurturance) ——弱い助けるものがない、あるいは病気で元気がない人や動物に同情し、救助すること。

承認 (Recognition) ——他人の自分に対する尊敬と是認を刺戟すること。

性欲 (Sex) ——恋愛関係を発達させ性関係にたづさわること。

地位への熱望 (Status Aspiration) ——自分が現在所属しているより著しく高い社会的経済的地位を望むこと。

地位への競争 (Status Striving) ——自分の社会的経済的地位を向上するため勤勉に働くこと。

救助 (Succorance) ——同情ある人によって救助されること。看護され、愛され保護され気ままにされること。

(註) 地位への熱望と地位への競争の二欲求はいづれも成就の欲求の特種のケースである。

一般的諸特質

不安 (Anxiety) ——他人の敵意や自分自身の行動への社会的反応から生じる傷害や不幸の意識的・無識的な恐怖。

感動性 (Emotionality) ——行動に愛情を表現すること。

代理性 (Vicariousness) ——他人が満足をしているという知覚から生じた

欲求の満足。

上部に書かれたようにそれは13種類の欲求と3つの特質に分類される。この中で一と組の補完的欲求となるものは、自己卑下と敵意の欲求、支配と尊敬の欲求、養成と救助の欲求、そして成就の欲求と代理の特質などである。これらの欲求において、たとえば一方が支配の欲求をもち、他方が尊敬の欲求を持った夫婦においては相互に欲求充足が可能となり両者の関係は適応状態を維持出来るであろう。

さて近代家族における夫婦は、民主的な近代思想のもとに個人主義化し、各夫婦は自己の欲求の満足を尊重する。この満足感は幸福と密接な関連を持ち、もし各自の満足が得られなければ幸福は消失し、自分達の結婚は失敗したと考え、夫婦関係は不安定となる。したがって夫婦相互の欲求の満足は、前近代的家族のそれとは比較にならぬほど夫婦間に強く作用するのである。前近代的家族においてはすべてが家中心的であり、家族を構成する個々のメンバーの幸福や欲求の満足よりは家全体の繁栄などが重要視せられたからである。かくて近代家族の夫婦間における相互の欲求の充足は、自由に個人中心的に行なわれるのであるが、その時夫婦相互の欲求は、同質的なものと補完的差異のものどちらが夫婦関係を安定せしめるかということについて次にのべよう。

まづ上部にのべたマレーの欲求の分類を使用し、バーグラー¹¹⁾の仮説的人物のケースを引用し説明しよう。その人物とは世界において有名な化学者になりたいという自我理想をいだいているが、現実には彼は、小さい製薬会社の書記にすぎず彼の能力から見てもそれは妥当な地位である。彼の地位と野心との間の距離は、相当隔たっているから、野心への達成は克服出来ない障害でさえぎられている。したがってこのような人は、たえず欲求不満となり葛藤にみちた状態となる。そこでこの状態を解決する方法は、悪い外的条件が地位の上昇の機会を彼にあたえなかったのだから、このような人は愛情でなぐさめねばならぬと信じる妻が必要であろうとバーグラーは、葛藤の解決法をのべているが、マレーの分類にしたがって次により詳細にのべよう。この人物は、地位

への熱望の強い欲求を持っている。もし妻が夫がみづから信じているように有能な化学者になることを誠実に夫に保証するなら、夫は多少は欲求不満を解消することが出来るであろう。ただこの場合、妻の方が欲求の満足を得ることが出来るかが問題となる。結婚の初期において妻は夫の地位への熱望の欲求は近き将来において輝かしい実現をみるものと信じ妻のこのような保証に夫が満足していることを知ってそのこと自体に満足する。すなわちマレーの代理の特質を妻は示し、夫の地位への熱望の欲求と補完的となり夫婦関係は安定する。しかし結婚後、時日の経過するにつれて妻は夫の能力を知り、間もなく夫に魅力を感じなくなるだろうが、妻は夫を世話し保護しなければならない男の子供だと無意識にみる母のように母性型 (**Maternal Type**) の妻となる場合が多い。夫は妻にたえず激励や保護を欲求しつづけている一方、妻もそのような夫に同情し救助することを欲求する。この両者の関係の型は、マレーの分類のなかで妻は養成の欲求を持つことになり、他方夫は、地位への熱望の欲求を持っているが、それは現実に達成出来ないために救助されたい欲求に変形され、相互の欲求はそれ故補完的となり、相互に充足されて夫婦関係は安定することになる。

他のもう一つの組み合わせは、妻の方に強い他人への尊敬の欲求を持つ場合である。この欲求は、相手を尊敬し賞讃したいと願うことである。結婚直後は夫を理想化しているから、夫はいかなる障害も打砕く野心にみたされた人のように思われ、妻の欲求は、満足されるであろうが、間もなく妻は現実を知り、夫は自分の尊敬と追従を受けるに足る有能な人物ではないことを知り幻滅的となる。この場合夫は、地位の熱望の欲求を完遂出来ない弱者であり、夫はむしろ他から同情され救助されたい欲求を持っている。これに反して妻は、夫を地位への熱望の欲求の完遂者としての強者としての夫を求め、そのような夫に対して尊敬の欲求を持っている。したがってこの場合、夫は救助されたい欲求よりは強者としての支配の欲求を保持すれば相互に欲求は補完的になり夫婦関係は安定するのであるが、これに反しこの場合の夫婦の欲求は、矛盾しているから

相互に充足されず夫婦関係は葛藤を生じ不安定となる。

このようにバーグラーの仮説的人物のケースから見ても理解出来るように欲求の相互補完の理論から夫婦関係をみれば、夫婦相互の同質的な欲求は、もはや欲求の満足を獲得出来ないことが、おのずから判明するであろう。すなわち夫も妻も支配の欲求を持つなら欲求の充足は相互に得られず、夫婦関係は不安定となるのである。かくて夫婦の欲求は、相互に補完的差異である時、夫婦関係は、もっともよく適応を保ち安定し結合度も強固であることが理解されるであろう。

同様の傾向をウインチ¹²⁾は、正常なよく調整のとれた夫婦関係を保っている若いヴィルとマリーカーター夫妻のケースをあげているのでこれを引用しよう。夫のビルは、或大学の教授の助手をしている。その性質は万事に消極的で思慮深く自己批判的で情熱に欠けている。グループ活動においてもチーフリーダーになることを好まない。また彼は自己表現に欠如するところがあり、とりわけ他人に敵意を表わすことを恐れている。また彼は内心自分の業績に対して承認を受けることを望んでいる。このような彼の性格は、彼の両親の家族、とりわけ母の影響によるところが顕著であった。彼の母は支配的な性格でビルの父や妹を支配し、また相手のわずかな敵意に対しても非難の感情を判然と表現するのであった。ビルは幼時他人からの承認を求める欲求が強く、したがって母から特に承認と愛情や賞讃を求めたが、彼の母は、その性格上、この種類のものをあたえることが不可能であり、ビルはいつも欲求不満の状態であった。また敵意の表現も母はこのような感情に敏感であったから、母から承認を得ようと努力するためにこれも抑圧することになった。そこで彼は母から承認や愛情を得ることや敵意を表現するこれらの欲求を禁止し、無意識的にこれらを自分自身に向って内面化してしまった。このような結果、彼は熱心に働くが、しかし競争的でなく内気で臆病で敵意がなく動作や言葉も精力的でなく、そして彼は他人を非難するのが正当である時にも自己卑下し、自己非難的となった。

では彼の妻のマリーの性格は、どうであろうか。彼女は大学を卒業し、現在小

学校の教師である。彼女はいつも服装を正しく整え陽気でドラマチックな話し方をし、またよく笑い人々に安定感をあたえた。彼女は多少敵意の欲求を持ち、それを感じた時はよく行動に表現した。さらに子供時代から承認への欲求は強かった。また権威や責任の地位をとることを望み、人々を支配する欲求が強い。彼女のこのような性格もまたビルと同様に彼女の母の影響が大きかった。彼女の母も支配的でマリーたちをよく世話をしていたが、子供達に対して精神的に十分な同情的理解をすることが出来なかった。その結果、マリーもビルと同様母の愛情や承認に対して欲求不満となった。しかし家族におけるマリーの地位はビルのそれと全く相異していた。マリーは三人姉妹の中で一番才能が劣り、やや劣等感を持っていたと思われる。ビルが静かに母に承認を求めたのに対しマリーの方は強い競争心を持ち、母の注意を他の姉妹より特別強く自分に引つけるため大胆に振舞った。マリーはビルと同様に承認に対して強い欲求を持っているが、しかしマリーの方は、もっと直接に大胆に明白にこの欲求を自分の行動に表現した。両者はこの欲求の強さは母からの欲求不満にされた経験から生じたと思われるが、しかしそこからは全く異なった性格へ導びかれたのだった。ビルは静かな服従的な自己卑下の性格となったのに反しマリーの方は彼女の母と同様に、支配的なまた陽気な態度を持ち敵意を明瞭に表現出来る積極的な性格となった。

さて以上のようにこの安定した夫婦の性格を見るとき、それは明らかに同質的ではなく異質的局面が顕著であることを我々は認めざるを得ない。ではこの夫婦の性格は補完的差異を有しているのでしょうか、それを次にのべよう。

まづ第一にビルがマリーに魅力を感じたのは、彼女が陽気で話し上手で自由に敵意を表現出来る性格であった。それに対して彼の方は自己批判的で絶えず自己卑下の欲求を持ち、この敵意の欲求を内面化し、抑圧し表現出来なくなったものを彼女が完全に恰も自分の代理となって表現してくれるように感じ欲求不満を消失することが出来た。マリーの敵意の欲求とビルの自己卑下の欲求はここで相互補完的となることは明白であろう。

第二は、マリーはたえず支配の欲求を持ち、また事物に対して熱意をもって対処し、人々の注意を自分に引つけそれを統制した。これに対しビルはマリーのそのような熱意に感心し賞讃の態度をもって望んだ。すなわち支配の欲求と賞讃の欲求は相互補完的となるので夫婦間は安定する。

第三に、夫婦は高い承認の欲求を持っていることは明らかであるから、二人の欲求はこの場合類似していることになる。この欲求の充足はマリーの方が明らかに多く達せられている。ビルはマリーの教師としての熱心な態度やブリッジやカルタなどの才能に対して多くの賞讃をあたえた。マリーは孤独を好まずたえず自分に対する人々の注意を求め、自分の話のきき手を必要とすることに対し、ビルは全く適任者であり、静かに話し相手になり、またそれに対して適切な注意をあたえ、たえず尊敬と承認を示した。一方ビルもこの承認の欲求は強いのであるが、それは内面化されているためにマリーのこの欲求と競争的にならず、専ら外的な条件——たとえば教授より学門的業績で承認をあたえられる——に転換される可能性があった。夫婦はこの承認の欲求においては類似的で相互の充足は直接的に完全に行なわれていないが、以上のべた状態によって夫婦関係は葛藤を生じることなく調整されているのである。

このようにパーグラウの仮説的人物のケースやウインチの引用した夫婦のケースからみて理解されるように性格の基底にある欲求の局面より夫婦関係の安定性をみれば、夫婦相互の同質的な欲求は、相互に充足不可能となり満足を得ることが出来ずかえって相反的となって夫婦関係は不安定となるのである。勿論、上部の例にあげた性格における補完的欲求の理論は、現実的には明確に現われず、錯綜され、あるいは外装された形態に変形されて不明瞭に表現されたりすることもある。しかし概略すれば、夫婦間の性格の次元において、相互に補完的差異を有する時、その関係は安定し、結合度もより強靱であることが了解され、従来の同質性の原理はこの場合妥当しないのではなかろうかと考えられるのである。

夫婦間の性格において同質性よりむしろ補完的差異を有する方に安定性があるとすれば、何故夫婦は相互に補完的差異を有するものに牽引されるのであろうか。またそのような異質的結合より生ずる愛情は、どのような特質を持っているのであろうか。

まづ性格の補完的差異を持つ夫婦が、相互に引つけられるということは、相互の欲求が補完的であり、その充足が可能である一方、同質的である時は、その充足が不可能であることはすでに述べた。今ここでは他の要因を個人心理的および社会的の二方面から説明することにしよう。

1) 個人心理的要因——自我理想の投影

人々の性格を構成している欲求の一つの基礎的特質は、不満足である。すなわち人々が欲求する場合、さまざまな社会的制約を受けるにしてもその欲求はなんらかの形で達成されなければ満足をうることは出来ない。この欲求の満足には、かならず一つの標準がある。自我欲求においてもその満足には、一定の基準があるのはいうまでもない。それは自我理想 (ego-ideal) と呼んでもよいであろう。換言すれば、この自我理想は、人々がそうありたいと願望する人々自身の概念である。

ヂェームス¹⁸⁾は、この自我理想の形成について次のように説明している。子供時代に人々は、努力してそれに到達したいと願望する多くのものを意識する。たとえば出世を目ざした子供達は、ベースボールの花形、音楽会の名ピアニスト、あるいは総理大臣などの自我理想をいただき、それに強く引つけられる。また人格特性などにおいても、子供達は、自分の周囲に居るとか、あるいは物話で読んだり、または映画で見た人物、たとえば、上品で優美でやさしいフローレンス・ナイチンゲールとか、あるいは自信に満ち勇敢で決然たる大胆な態度をいつも維持しているトラファルガルのネルソン提督などの人物に魅せられる。そしてこのような種々の性格特性を自分の自我理想として把持し望むので

ある。しかしこれらの自我理想は、相互に矛盾し錯綜する。矛盾のみばかりでなく、実際にこれらを自分の行動に取入れ、自分の自我理想に接近するように試みようとする時人々はこれらの中で、きわめて少数のもののみを自分の行動の組織へ統合することが可能であるばかりである。たとえば少年が、出世の目標として自分のいなく多くの自我理想の中から勇敢な軍人を選んだとすれば、他の自我理想としてかつて選んだベースボールの選手、名ピアニストなどの自我理想は消捨され、勇敢な軍人に適切な人格特性や行動特性のみを組織づけねばならぬことになり、それにしたがって自分の話し方や歩き方、衣服などを整えるようになる。

このように自分の生涯の目標として選んだ自我理想の形成の場合、除外され消捨されたものは一体どのように処理されるのであろうか。この問題についてフルューゲル¹⁴⁾は次のように解明している。このような時自我理想や自我理想の或部分は、消失し、パーソナリティーのうえには顕著に残存しない。そしてまたこの消捨された部分は、次の異った方法で存在することがある。第一には、それは可能性の形で存在する。たとえば名ヴァイオリニストの自我理想を持った人が、何かの障害でヴァイオリンの修業を放棄した場合に、彼がもしそれを継続していたらきっと優秀なすばらしい名ヴァイオリニストになっていたかも知れないと考える場合はこの例であろう。

第二においては、人々は自分の放棄した自我の秘蔵されたこの局面を現実獲得している他の人がもし存在するとすれば、その人へ引つけられるのである。これを自我理想の投影という。かくして、かつてネルソン提督などの大胆な自信にみちた勇敢な態度に魅せられた少年は、またかつてナイチンゲールの上品で優美なやさしさを自我理想に持ったから、そのような女性が自分の周囲に存在していれば、その女性に心を引つけられそのような妻を持つことを欲求するであろう。

この例は、詳述すればさらに次の二つの事柄を示している。最初にこの少年は、彼の自我理想の捨て去った部分すなわち上品で優美でやさしいという性格

特性を少女に投影する。これらの性格特性は、すでに消捨されたが、その理由は大胆で勇敢な男子としての特性には矛盾し、自分の出世の目標として立てた自我理想に適した行動に組織づけ統合することが出来なかったからである。次に少年は自我理想として大胆さや勇敢な特性を表現すると同時に、その大胆さを招来するものとして少女のやさしさを見るようになる。このようにして相互に矛盾するように見える性格特性の一組は、欲求において補完的となり、一方は他方に引かれ、他方は一方を求めるようになる。性格において補完的差異を有する夫婦も当然このような自我理想の投影という心理学的法則の影響を受けて相互作用が行なわれるのはいうまでもないであろう。

最後にこの自我の投影の過程は意識的であることもあるが大部分は無意識的に行なわれる。そして性格の補完的差異は一面において自我の投影を通じて生じた差異であり、全く相互に関係のない異質的なものではない。いわばそれは自己から派生した差異性である。かつて意識的・無意識的に自己の憧れ慕い求めたものであり、その意味でこれは同質性をその中に秘めた異質性と認めることもできよう。しかしこの過程は大部分は無意識的に行なわれるのであるから現実的には全く異質的なものとしてその対象を見る点においてこれは異質結合の一種類として一般には考えられているのである。

2) 社会的要因——近代資本主義的交換の原理

性格の補完的差異は、近代社会のどのような影響によって助長されたのだろうか。

まず近代資本主義社会の特徴をのべれば、それは一方では政治的自由の原理にもとづいているが、他方ではすべての経済の調整者としての市場の原理にもとづいている。商品市場は商品が交換される条件を決定している。この交換とは同質的なもの間には行なわれず一方の求めるものを他方が所有し、また他方も一方が所有するものを欲求する時、ここに交換が成立するのである。交換とは換言すれば、補完的差異の結合を意味するともいえよう。このような交換は資本主義社会に急速な進展をとげ、終に交換自体が本来の目的となってしま

った。¹⁵⁾ これらの特異な資本主義的性格は、近代人の性格構造に深い影響をあたえたのであった。そしてこのような交換を求める動因が対人関係の領域でも動いている現状であり、恋愛ですらパーソナリティー市場における価値を考慮して期待できるかぎりのものを得ようとし、二人の人間のあいだの有利な交換でしかない場合がよくあるのである。¹⁶⁾ フロム¹⁷⁾によれば、おのおのの人間は、いくつかの交換価値の側面のまじり合っただけで一つになっている「包み」である。彼の「パーソナリティー」とは、容貌・教育・収入・成巧のチャンスのように自分自身を高く売りつける性質を意味している。そして各々の人間は、手にはいるかぎりの最も高い価値でこの「包み」を交換しようと努めている。会合への出席とか、社交の機能は、一般にこの交換のはたらきをしているのである。人々と知り合っただけで出来るだけ有利な交換をするために、少しでも高価な「包み」に出会いたいと熱望している。人はその社会的地位を交換しようとする。結局、自分自身をもっと高いものと交換しようとし、このような過程でフォードをビュイックと交換するのと全く同様に古い友達、習慣、感情を新しいのと交換するのであるとのべている。

このように資本主義社会の交換の原理が、近代家族の夫婦の心理へ作用するのは当然であり、夫婦はこの原理に支配され相互に自己の欲求を充足するためによりよきものを求め合うという利視の欲求を生じるのである。夫婦間の性格の補完的差異による結合は、このような資本主義社会の交換の原理に刺戟されて益々助長され、強化されていくことや、外部社会の傾向と夫婦間の内的関係は矛盾を生せず適応を円滑ならしめることは、この夫婦関係の性格の補完的差異による結合をさらに強靱とならしめるであろう。

しかしここで考慮せねばならぬことは、フロム¹⁸⁾によれば、このような交換が目的になった人間関係は、疎外の症状であるとのべていることである。それならば、この性格の補完的差異による夫婦関係は、疎外の症状を呈しているのであろうか。勿論フロムの疎外現象は、高き人格的自我のレベルを内容とした自我の喪失を意味するから、その自我の質的な高さのこの点においては疎外と

もいえようが、少なくとも自己を認識する点においては、この補完的差異による結合は、疎外現象を打破する要因を形成しつつあるものと思はれる。すなわち、第一に交換においては人々は、相互にまず自己に立脚し、自己の不足せるものを認識し、それを補充せしめるものを他方から求め合うものであった。それ故交換の前提には冷静に自己を意識しなければならぬ。夫婦関係のような最少の二人集団においては、必ず対面接触が行なわれているから、このように相互の自己を認識するこの過程は、明確に行なわれ、容易に消失しないであろう。また第二には、さきにも述べた如く、自我の投影の時、もしこれが意識的に行なわれたとすれば、それは自己の不足せるもの、すなわち自己をより理想的に、より完全にするために、自己に存在しないものを相手から求めるという心理的過程であり、夫婦は、より深く自己を洞察する点において、それは全面的な自己疎外とはならないのではなかろうか。かくて性格の補完的差異による夫婦関係は、近代資本主義的交換原理に支配された人間関係ではあるが、それは疎外よりむしろ自己確認へ導く契機的要因を作るものであるのではないかと思考されるのである。同質的結合が親和や愛着の感情の中に埋没し、自己を忘却することこそ疎外の状態であり、これに比べてこの補完的差異による結合は、全面的疎外より脱却しているのではなかろうか。

最後にこの欲求の補完的差異より生ずる愛情は、いかなる特性を持っているかをのべよう。一般に愛情については種々の見解があるが、この補完的差異より生ずる愛は、いうまでもなく欲求に基礎づけられたものである。すなわちそのような愛とは、一方（愛された人）が他方のもつ或重大な欲求に合致すること、あるいは一方あるいは両方に高く評価された人格的特性、たとえば勇敢さ、やさしさ、技能などを、他方へ表現したりする人々相互の関係で、一方（愛する人）によって経験された肯定的感情である。さらにこの種類の愛情を明瞭に理解するために愛情に関する著明な見解をのべよう。オーマン¹⁹⁾は、我々は我々自身を完全にすることを我々が欲求する人、あるいは我々が、自我の欠乏せるものに対して我々の感情を満足させる人を愛するとのべている。またフロイ

ト²⁰⁾によれば、愛の対象を選択する時には、人々がそれに到達することが不可能なものを所有している相手をさがし求めると指示し、またベネディック²¹⁾は、愛人はお互に自我理想の交換を提供することを主張しているとのべている。これらは、補完的差異より生ずる愛情の特性を指示しているともいえよう。これらの見解より考えられることは、まづ第一に、この補完的差異より生じる愛情とは自己を完全にするもの、すなわち、よりよき半身を求めることであるから、この愛情には多少とも理想を志向する向上性および進歩性をうかがうことが出来よう。またそれは自己が著しく強調された愛情であり、同質的なものの中に生ずる愛情に比して個人が顕著に示された愛情ともいえよう。

第二に、それは愛人同志は、自我理想の交換を求める。その基底には明らかに交換によって自己の自我理想に到達したいという利視の欲求を我々はみることが出来る。このような利視の欲求は、前述したように資本主義的交換の原理によって益々助長し増大されたといえよう。それ故、この補完的差異による愛は、一面において市場交換的愛ともいうことができる。夫婦間の愛の種類には性愛、ロマンチックラブ、コンパニオンシップラブ（友愛）、そして人格愛というさまざまな種類があるであろうが、補完的差異より生ずる夫婦愛は、このいずれにも属せず交換的愛に特質づけられている。この愛は同質的結合による感情に高調された自己没却的愛に比すればその根底は利視による結合であり、合理的であり、相互の関係は冷静で淡泊であり、そこには何ほどこか不安定性が包含されているであろうが、個人に重点が置かれ、自己主張的である点において、またより高き理想への追求を志向し前進的である点において、それはまさに近代的愛といってもよいであろう。

5

近代の急激な社会変動は、文化的異質化を招来した。近代家族においても当然この影響を受け、社会的地位・教育・宗教・職業などにおいて異質化された者たちが夫婦となりその結果、不安定となった。この異質化は、性格にまで波及

し、近代家族の夫婦関係は解体の一路をたどるというのであった。勿論このような異質化によって近代家族の夫婦関係は、封建家族の夫婦関係より一般的に崩壊されやすい傾向で不安定であるのが一般的特徴であることは否定できない。しかし性格の次元において、夫婦間のその異質性は、すべて解体に導びくものではなく、異質性の一種類である補完的差異においては、欲求充足の局面において同質的なものよりはむしろ夫婦間の適応はすぐれ安定性を保持することを我々は上部において述べたのである。

このような性格における補完的差異は、近代家族の夫婦間に多数存在し、これが代表的形態になっているのではないかと思われるのである。何故ならば近代家族において婚姻は、当事者本位であり、専ら配偶者については当事者の個人の選択に重点がおかれている。これに反し、封建家族において婚姻は、家中心主義であり、配偶者の選択は、専ら家長がこれにあたった。またその選択の基準は、夫婦の生家の社会的地位、財産・宗教・職業などの類似性に考慮を払われ、当事者の性格の一致については第二義的に取扱われたのであった。このような状態においては当事者の補完的差異による性格の選択はおおよそ実行不可能であった。これに比して、近代家族を形成するための婚姻は、近代社会の自由平等の風潮のなかで当事者が、任意的に相互に平等の立場で各自の欲求に一致した配偶者を選択することによって行なわれるのである。その配偶者選択の初期において当事者は、その時代の配偶者選択の基準として一般にみとめられた文化的基準にしたがって行なうであろう。たとえば、映画俳優のような美貌、流行にあった服装、あるいは明朗な性格などは、当代の配偶者選択の文化的基準であるから、当事者たちはこのような文化的基準を有する人を理想的配偶者と定めるのである。しかし文化的基準に示されたものは、外面的な基準で内容性に欠け、人々の性格の深さにまでは表現出来ない。そこで数回の結婚前の交際でこのような一般的な文化的基準に一致した配偶者は、自分達の欲求に合致しないことが発見され婚姻にまでその交際は、進行しないことが屢々生ずるであろう。また人々は、現実にこのような文化的基準に適合した配偶者を見出

さないこともあり、そこでこの一般的文化的基準を低下したものに妥協して結婚して下う場合もあろう。あるいは熱狂的恋愛によって人々は自分の配偶者を一時的に理想化して、その不完全さを熟知しないで結婚することもある。しかし大部分のものは、最初の文化的基準に一致した相手よりはむしろ自我の投影された自己の欲求を充足せしめる配偶者を選択する。すなわち当事者たちは性格の補完的差異に一致した配偶者を選択するのである。したがって近代社会の自由で任意的な配偶者選択の様式は、当然この欲求の補完的差異の法則に支配される結果となり、夫婦は補完的差異を有するものが多数をしめ、全く異質的な夫婦は、むしろ稀な現象になるのではなかろうかと考察されるのである。このように性格における補完的差異を有する夫婦関係は、近代家族の代表的形態となり、ますます増加の傾向をたどるであろう。この事態から推測すれば、近代家族の夫婦関係は、全く異質的で不安定であるとはいえないであろう。

つぎにこの補完的差異の結合の特質についてのべておこう。これは相互に自己の欲求に補完するものを他方よりあたえられることにより欲求の満足を獲得することによって相互に適応し、その結合が維持されている。そこには交換的な要素が多く占められ、その基底には明らかに利視の結合が支配している。これは近代社会の市場交換的特色が近代社会の人間関係に反映したものと見ることができよう。類似や同質性をもととする親和の結合と比べれば、それはあまりに合理的で淡泊な関係ともみられよう。しかしこの利視の結合は、疑もなく自己に立脚したものである。すなわち現実の自己に存在しないより完全な自己の側面を求めるために人々は相手にこれを投影する。そしてそれは、自己の自我をみとめると同時に相手の自我を認識することともなろう。このようにより良き相互の自我理想を求め合う点においてもこの補完的差異による結合は、より前進的であり向上性を有するともいえよう。これに反して性格の類似による結合は欲求充足が不可能であるし、ただ親和や愛情にのみ没入し、非合理性に終始し、進歩性がなく自己の覚醒は望めない。

さてこの補完的差異の基底にある自己がさらに明確に認識され、また利視の

欲求がより高いレベルに純化されて全く異質的なものの中に人間としての共感を意識的に自我の深層において夫婦が相互に深く洞察することが出来るとき、いかに性格における異質性のはげしい夫婦関係の中にも恒常的な安定した結合が作り出されるのではなからうか。この意味においてこの性格の補完的差異は、他の全く異質的なもの間にも結合をもたらす将来のより高い次元の結合に対する一つの過渡的要素として私はこれを認めたいのである。

この補完的差異による結合は、上にのべたように近代家族の夫婦関係の代表的形態であった。このように思考すれば近代家族の夫婦関係にもなにほどの安定性を我々は発見したのであって、夫婦の文化的異質性は不安定性をもたらすであろうが、性格の異質性においては、すべての近代家族の夫婦関係がこれによって解体されていくとは一概に断定出来ないと考えるのである。

参 考 文 献

- 1) Crow and Crow; *Mental Hygiene in School and Home Life*, p. 127
- 2) A. G. Truxal and F. E. Merrill; *Marriage and the Family in American Culture*, p. 461
- 3) R. G. Foster; *Marriage and Family Relationship*, p. 232
- 4) E. W. Burgess and L. S. Cottrell, Jr.; *Predicting Success or Failure in Marriage*, p. 84
- 5) Cf. Bain, *Emotion et volonté*, p. 135
(高田保馬著『社会学原理』p. 312)
- 6) Cf. Simmel; *Soziologie*, S. 167
(高田保馬著, *ibid.*)
- 7) 福武 直, 日高六郎, 高橋 徹編『社会学辞典』pp. 504~505
- 8) エーリツヒ・フロム, 谷口隆之助, 早坂泰次郎訳『人間における自由』 p. 142
- 9) 福武 直, 日高六郎, 高橋徹編, *op. cit.*, p. 917
- 10) H. A. Murry et al.; *Explorations in Personality* ch. 3
- 11) Edmund Bergler, *Unhappy Marriage and Divorce*, p. 27
- 12) R. F. Winch; *The Modern Family*, pp. 414~424
- 13) William James, *Principles of psychology*, vol. 1, pp. 309 ff
- 14) J. C. Flugel, *Man, Morals and Society*, ch. 13

- 15) エーツリヒ・フロム, 加藤正明, 佐瀬隆夫訳『正気の世界』 p. 170
- 16) *ibid.*, p. 171
- 17) *ibid.*, p. 171~172
- 18) *ibid.*, p. 172
- 19) O. Ohman, "The Psychology of Attraction," ch. 2 in H. M. Jordan (ed) *You and Marriage*, p. 15
- 20) S. Freud; *Group Psychology and the Analysis of the Ego*. p. 74
- 21) Therese Benedek; *Insight and Personality Adjustment*. p. 25